

Dance Movement の意味のとらえ方

石 黒 節 子

舞踊の意味について検討しようとするとき、舞踊美学の権威であるフランシス・スパショット (Sparshott 1988 p.187) が指摘するように第1に検討する上での基礎がない、第2に前提となる理論がない、第3に実技において生起する問題との関連で実りある方向をもつことなどに留意したい。そこで本報告では主に記号学の分野で使用されている理論に沿って舞踊とのかかわりを検討するものである。

ここで movement という言葉は位置の移動、身体や手足の動き、気持ちの動きを含む『変化をうみだすもの』ととらえた。

1. 舞踊の単位とはなにか

あるジェスチャーを基本の単位として選び、その動きのはじまりと終わりを考えるとき、これが人間の動きの基本的要素である屈曲、伸長、ねじれ、回転などと結びついたり、歩、走、様々なステップ、跳躍と結びついているのを無視できない。また、瞬間的なポーズや静止も身体活動上重要な意味をもつ。

これらの動きの基本的単位がそのまま舞踊の単位であるとはいえない。アドシヘッド (Adshead 1988 pp.21-40) がのべるように、動きの基本的単位は① movement と他の要素間の違いを区別し、②これらの特色を記述し、③命名する、ことにはじまる。これら命名された単位は言葉の語彙 (lexicon) にあたる。

バレエにおいてはこうした単位は、約200のステップの他にアラベスクやピルエットなどの名称がつけられている。モダンダンスにおいては、自身の語彙をつくりだすところから始まると言える。例えば、マーサ・グラームのコントラクション・リリース、ドリス・ハンフリーとワイドマンのホール・リカバリー、またダンスウォークに関する微妙なちがいが、つまり自然動作を重視するダンカンウォーク、肋骨を引き上げながらすり足で進むリモンウォークなどは西洋舞踊に共通な歩き方であるまずつま先を床に触れてから序々にかかるとに体重をうつすやりかたとはすこし違う。

語彙がつながりスタイルをうみだす。舞踊の各種類はそれぞれの範囲 (range) があり、振付者や演技者はこれらスタイルによって自身の振付や演技を決める。

舞踊人類学者の多くが動きの記譜と分析の際ラバノーテーションを使用する。この方法は着実な

研究と業績を残しているにもかかわらず記譜と解読に時間と努力を要するところに難点がある。ネルソン・グッドマン (Goodman 1968 p.217) のことばを借りるなら「一般の音楽譜と同様に、理論上、実践上のテストは大変うまくパスしている」一方で、コーハン (Cohen 1987 p.154) の指摘するように「粉々にそれぞれの動きにしてしまう以外の要素が舞踊には無いかのようである」という欠点もある。

バーティニエフ (Bartenieff 1967 p.92) はダンスのパターンが矛盾なく異文化間に比較され、文化的歴史的コンテキストの中で地域的、機能的な種別を可能にするための研究のために、ラバンのエフォートとシェイプの概念とアラン・ローマックスのカントメトリックス (cantometrics) を結合させコレオメトリックス (choreometrics) のシステムをつくりあげた。彼女は身体の態度 (attitude) と姿勢 (posture) および変化のしかたを優先させ、次のようなカテゴリーを使って分析した。

身体の態度 (body attitude)

エフォート (effort)

シェイプ (shape)

空間の方向 (spatial orientation)

動きの始動 (initiation of movement)

連続的形状 (sequence configuration)

フレーズング (phrasing)

この方法は、人が他者を環境とのかかわりにおいて知るところにあり、動きをばらばらの寄せ集めとして捉えるのではなく、全体として受け止めようとするところに特色がある。また、動きの質 (quality) に着目し、「movement という言語によって外界への方向づけより、行動、活動、舞踊のなかに沸き立つ感情がはけ口を求め、内面の世界の方向を成立させる」という立場にたっている。分析の角度はエネルギー、ながれ (flow) に特色をもつ。各スケールによってとらえられた動きのパターンは電算機にかけられ中核 (core) が抽出される。

カガン (Kagan. E 1978 pp.75-92) はこの方法を「ラバノーテーションだけでは、あるスタイル上のものと表現的観点を一致したかたちで確実にとらえることができないが、エフォート/シェイプはより完全な記述をする上に可能性がある」と評価した。

一般的なダンスムーブメントのカテゴリーはハ

ンナ (Hanna 1979 pp.245-246) の研究にみる事が出来る。彼女はムーブメントを「時間と空間の中で、刺激におうじて放出される筋肉の反応を通してのエネルギーの視覚的、運動学的な結果」と定義しながら、これがダンスの本質であるとのべる。また、ダンスムーブメントのデータ・カテゴリーを作成し、その部分間の相互関係である構造とスタイル(すべての要素の質や特徴となる様式)を次のように分類した。

空間 (space)

方向 (direction), レベル (level), 広さ (amplitude), 焦点 (focus), グルーピング (grouping), 形態 (shape)。

リズム (rhythm)

テンポ (tempo), 持続時間 (duration), アクセント (accent), 拍子 (meter)。

ダイナミクス (dynamics)

空間 (space), 流れ (flow), 移動 (locomotion), 投射された特質 (projectional quality)。特徴的な身体の使い方 (characteric use of body) 姿勢 (posture), 移動 (locomotion), ジェスチャー (gesture)。

彼女の舞踊人類学上のパースペクティブは民族学の方法論や文化人類学と考古学を伴う社会言語学をダンス研究のための方法論を発展させるための基礎としながら、ダンスの動きを社会文化的なコンテクストのなかでのコミュニケーションの媒体として扱っている。そしてこの立場をダンス記号学と命名している。このように、舞踊の単位は個々の動きを細かく細分化するかたちから、その質をどう捕えるのか、更には環境や社会というコンテクストのなかで対応する個またはコミュニケーションの媒体としてとらえられるようになってきた。

2. シンタックス (syntax)

個々の動きがどのようにつながり舞踊のさらに長い単位を構成していくのであろうか。アン・ハッチンソン (Hutchinson 1970 p.12) は舞踊は言語のようなものであり、その中には名詞、動詞、副詞のような文法的カテゴリーがあると考え、つぎのようにのべる。「ムーブメントは変化を意味し、必然的に生起する活動 (action) の変化を生み出す。ムーブメントの文法 (grammar) において、これらの活動を動詞ととらえ、動く身体の各部分を名詞に、活動がどのように行われるか、または変化の程度、パフォーマンスの方法を副詞で表す。」この立場に立つと舞踊は言語的枠組で捕える事が出来る。

それでは言語となったく同じつながりかたになるのであろうか。「手がしなやかに揺れる」を例に考えてみよう。ハッチンソンの立場にたつと確かに変化をうみだすための名詞、動詞、副詞が出

揃っている。しかし、言語で言うところの手がしなやかにゆれるという意味と舞踊の意味とは異なる。つまり、この動きが「風」を意味するのか「波」を意味するのか「心のゆれ」を意味するのかわからない。舞踊の動きのつながり方は発語とその言葉の意味が密着する言語のようにはいかないのである。言語学ではシンタックスは統語 (syntagm) の一形式であり、意義深い単位の意味をつくりだす関係である。つまり、ある意味を成立させるための言葉のくさりとしてシンタックス (統語論) をとらえる事が出来る。

言語学の体系化に多大な貢献をしたソシュールは言語と発語の違いを強調し、意味するものと意味されるものとは表裏一体であると考えた。これをバレエのアラベスクにたとえると、アラベスクの身体的形態はアラベスクの意味と表裏一体であることになる。このパにかぎっては、このことはうなづける。アラベスクという言葉の意味にアラビアの唐草模様というのがあるからである。しかし、このパがいつもアラビア風のテーマに沿って踊られるとは限らない。ヤコブ・ゼリンガー (Jacob Zelinger 1979 p.41) は「ダンスにおいてはきちんとした形式をもった統語論や舞踊単位の個別化は意味をとらえる上で意義がない。むしろ、ダンスやダンスの連続を範列 (paradigmatic) と連辞 (syntagmatic) から考えることがより意義深いのである。」との見解を示した。この考え方をさらにすすめるならば、動きの区切りかたが問題になる。なぜならば、意味とはなによりも『きりわけること』になるからである。この主張はバルトによってなされたもので「言語とは、音と思想を同時に分解しつつ、結合する両者の介在物であり、それによって連続的世界に『くぎり』をつけるものである。」(加藤茂 1990 p.35) となる。

それではどのように区切るのかが次に問題になる。ここでいう連辞とは線的で不可逆的な記号のつながり方で、その前後関係から意味がうまれる。舞踊を例にとるならばバレエにあるトンベ、パドブレ、アッサンブレというパがある。このアッサンブレはピルエットとかアラベスクにおき換わったりするが、このアンシュルマン (結合) に独立した意味があるわけではない。バレエやモダンダンスにおいては線的な結合によってうまれる意味は動きをどこで区切るかが問題であろう。2つとか3つからなる動きから、1作品まるごとまでバリエーションはひろい。アメリカの新しいダンスに影響をあたえた音楽家ジョン・ケージの、ダンスの新しい形は意味をひとまとめにしようとする試みの不在によって古い形から区別する、との指摘にもあるように作品のスタイルによっても異なる。

範列とは諸記号の空間的な連合を指す、ここで

はなんらかの共通要素と差別的要素をもつ諸記号が記憶のなかで潜在的に連合しあうとされ、連辞が『そこにあることにおいて切り分けられる』ことにたいして『そこにはないことにおいて分類される』と言われる。文学では詩的表現がこれにあたり、ここでは読み手の解釈が重要になる。このことは舞踊においては意味を決定するうえでかなり魅力のある立場である。なぜならば舞踊においては観客が意味を決定する際に重要な役割をはたすからである。前にものべたバルトの主張、つまり、連続的な現実世界への区切り際に際し、踊り手と観客との間にそこにはないことにおけるコミュニケーションが成立し、舞踊の意味が決定されるからである。

3. 意味

ロイス (Royce 1984 pp. 3-24) は舞踊やマイムの高度に様式化された動きは意味を伝達、操作することが可能であると述べながら動きの意味を直喩の意味と隠喩の意味およびマズルカやタンゴなどの舞踊そのものに属する意味の3つをとりあげ、演者、観客の創り出す意味の重要性について述べている。ハンナは動きの意味をさらに厳密にとらえるために、意味を伝えるためのダンスに利用できる6つの象徴的な工夫を示した (Hanna 1979 pp.38-46)。その6つとは具象化 (concretization)、偶像 (icon)、様式化 (stylization)、換喩 (metonym)、隠喩 (metaphor)、現実化 (actualization) である。また、意味をもたらす工夫として8つの領域を示した。それは、イベント、ボディ、パフォーマンス全体、広範囲のパフォーマンス、使用される特定の動き、他のメディアとの関連、他のメディアによる伝達手段、臨場感 (presence) などである。これらを縦と横の網目にしてダンスという記号を解釈するための手段とした。彼女はこれら網目にさらに因習的な手段とオートグラフィックな手段の2つをもちこむことによってコード化と脱コード化の論を進める。これらの視点にたちアフリカのウバカラダンスを解釈したり、ジェンダーやストレス、さらに広告との関係で現代社会におけるダンスの意味を考察しようとしている。

4. 実技とのかかわりについて

以上の報告の後に、自身の創作体験をふまえながら舞踊へのコード化について『羅生門』を例に自身の身体に発するオートグラフィックな手段を通しての例と、『秘儀』における伝統的な儀式から舞踊への脱コード化の例をビデオで示しながら、『生を脅かすものへの抵抗』の意味についてふれた。

今回は舞踊の意味のとらえかたについての入り口にしかたどり着くことが出来なかったことを反省し、本論の発展を今後の課題としたいと思っている。

引用文献

- Adshead, J, 1988, *Dance Analysis*. Oxford University Press.
 Bartenieff, I, 1967 *Research in anthropology : a study of dance styles in primitive cultures. CORD Dance Research Annal. I : Research in dance : problem and possibilities.*
 Cohen, S, S, 1984 *Ingarden's Aesthetics and Dance.* edited by Maxine Sheet. *Illuminating Dance* Bucknell University Press.
 Goodman, N, 1968 *Langage of Art.* Indianapolis : Bobbs Merrill.
 Hanna, J, L, 1979. 1987 *To Dance is Human.* The University of Chicago Press.
 Hutchinson, Guest, A, 1970 *Labanotation.* London OXFORD University Press.
 Kagan, E, 1978 *Toward the analysis of a score. A comparative study of Three Epitaphs by Paul Taylor and Warter Study by Doris Humphrey CORD Dance Research Annual IX : Essays in dance research.*
 加藤茂 1983, 1990『芸術の記号論』勁草書房
 Loyce, A, P, 1984 *Movement and Meaning.* Indiana University Press.
 Sparshott, F, 1988 *Off the Ground.* Princeton University Press.
 Zelinger, J, 1979 *Semiotics and Theatre Dance. New Direction in Dance* Pergamon Press.

* 1991年度春季第31回舞踊学会
『舞踊學』第14号より転載